

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：35402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10842

研究課題名(和文) 保護者の関与と子どものスポーツ習慣形成に関する総合的研究

研究課題名(英文) The influence of parents fiscal and psychological support on youth sport participation

研究代表者

渡辺 泰弘 (Watanabe, Yasuhiro)

広島経済大学・経営学部・准教授

研究者番号：30611610

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、保護者の財政的および心理的支援から子どものスポーツ参加モデルを提示することである。保護者は、子どもの教育方針に対して投資することをいとわず、ポジティブな経験をしていると考えている。子どものスポーツ活動は、教育系の習い事と同レベルの選択肢になっており、子どものスポーツ活動へ多額の資金を投入する傾向が垣間みえる。さらに、スポーツに対して肯定的な価値観を持つ保護者は、子どものスポーツへの参加に対して高い期待を抱いている可能性がある。保護者のスポーツに対する態度は子どものスポーツへの関心を促進するステップであり、保護者による子どもへの干渉は必ずしもマイナス要因ではないことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スポーツ環境における保護者の関与やサポート要因を特定または予測するには十分でないとの指摘から、既存の理論をベースとしたフレームワークを構築し、実際にデータをあてはめて検証をした。結果、保護者の財政的負担感および心理的サポート要因、行動意図(子どものスポーツ参加)などの変数間の関連を明らかにすることができた。研究成果によって、現場レベルでは、子どものスポーツ習慣形成のために戦略を立てることが可能となる。政策レベルでは、政策立案時における子どものスポーツ活動への補助(例えば用具の無料貸与または提供、スポーツクラブ入会サポート、プロスポーツ観戦の優遇制度など)といった具体的施策の立案も可能となる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to present a model for the progression from parental fiscal and psychological support with children's sport participation. Parents think are willing to invest for children on their educational policy, and have a very positive experience. In other words, taking sports-related lessons has become choices that are on the same level as taking education-related lessons, and this offers a glimpse of the trend for a large amount of money to be invested in education. Moreover, parents with positive values about sport may combine with high expectations about their child's involvement. It was suggested that parental attitude toward sport is a step of the promotion of the interest in sports of children, and interference on child by the parent were not necessarily negative factors. Parents play core roles in children's sport experiences with the encouragement, opportunities, resources, and financial support.

研究分野：スポーツ経営学

キーワード：財政的負担感 保護者の期待 保護者の態度 子どものスポーツ関与

1. 研究開始当初の背景

子どものスポーツ参加は、心身の健康、ルールや規範、伝統を学ぶことを含んだスポーツ習慣形成に寄与するとともに、今後のライフステージにおける「する・みる・ささえる」といったスポーツ活動を促進し、エリートやプロスポーツへ通じる可能性も秘めている (Coakley, 2017)。子どものスポーツ参加に対する保護者の関与が顕在化している昨今、年収の高い保護者の子どもほど定期的に運動をしており、スポーツ活動に肯定的な価値観をもつ保護者は、子どもとの関係について高い期待を示す傾向がある。その一方で、子どものスポーツ活動にかかる費用負担が重くのしかかっている現実も指摘されている (Wheeler & Green, 2014)。

また、保護者の子どもの活動への高い期待は、一定時期まではポジティブな影響を及ぼすものの、ある時期から子どもにとってストレスとなり、保護者と子どもの意向にギャップが生じることも報告されている (Green & Chalip, 1997; Knight, Boden, & Holt, 2010; 武田・中込, 2003)。これらの研究は、模範的な親子関係を望む保護者の感情的なサポートと子どものスポーツ活動への継続参加に関連があることを示したものである。

このような保護者による子どもへの期待は、子どもにポジティブなプレッシャーを生み、保護者の期待に応えようとする子どもの意識が子どものスポーツ習慣形成に影響を及ぼすものと考えられる。その結果、多くの保護者は、子どもにとって良い保護者であるという期待に応えようと努めるが、保護者の教育方針や振る舞いに対する子どもの態度が相反するものとなれば、その不満が子どものスポーツ参加に悪影響を及ぼすことも懸念されている (Elliott & Drummond, 2017)。保護者が、子どもの能力を理解し、子どもに成功することの大切さを伝える役割は、子どもの成功体験や課題の主観的価値に関連する達成行動を促すこととなる。Harwood and Knight (2015) や Holt et al. (2008) は、スポーツにおける保護者の関与、励まし、物理的、心理的サポートの諸要因を明らかにする必要性を述べていることから、保護者と子どもの関係を理解することは、子どものスポーツ参加行動を規定するうえでも重要であると考えられる。

2. 研究の目的

保護者は、子どもの継続的なスポーツ活動をサポートするために、レッスン料、用具代、練習場代、一緒にトレーニングをするなど、子どもの能力を伸ばすための重要な役割を果たしている。しかし、理論的な枠組みに基づいて行われた一連の研究は多くみられるものの、保護者の財政的負担感や親子間の相互関係に焦点を当てた研究は不足している。先行研究では期待値理論などをもとに保護者のスポーツ関与の重要性が示されてきた (e.g., Eccles, 1983; Simpkins, 2012) が、Holt et al. (2008) や Dorsch et al. (2021) はスポーツ環境における保護者の関与やサポート要因を特定または予測するには十分でないことを指摘し、スポーツを通じた親子関係を構築するための理論的アプローチを検討する必要性を述べている。そこで本研究では、期待値理論の枠組みをベースとして、保護者の心理的サポート要因、保護者の財政的負担感、行動意図 (子どものスポーツ参加) などの変数間の関連を検討した。

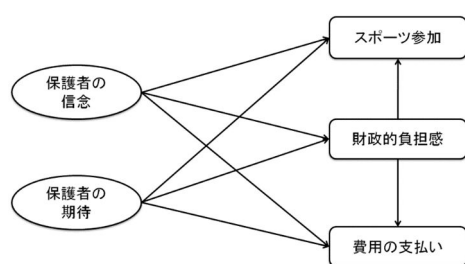


図1. 研究のフレームワーク

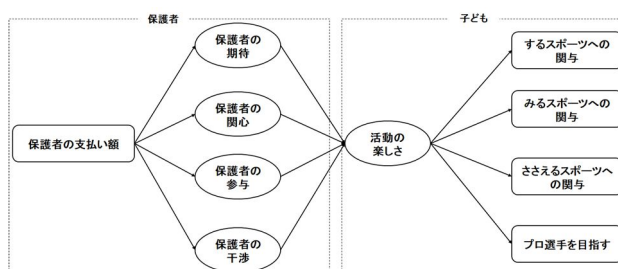


図2. 研究のフレームワーク

3. 研究の方法

本研究は、先行研究 (e.g., Dunn et al., 2016; Green & Chalip, 1997) の検討から2つの研究の枠組みを構築して進めた。

研究は、子どものスポーツ参加による親の教育信念、スポーツ活動への期待、財政的負担感、子どものスポーツ参加頻度、および費用の支払いに関する因果モデルである (図1)。このモデルの検証について、Green and Chalip (1997) の研究手順を参考に、2つプロスポーツ組織 (JリーグおよびBリーグに加盟するチーム) が主催しているスクールへ参加をしている親子を対象に実施した。サッカースクールのサンプルでは400名に調査用紙を配布し、200名のスクール参加者の保護者のデータを得た。またバスケットボールスクールのサンプルでは350名に調査用紙を配布し、151名の保護者のデータを得て、それぞれを分析した。調査項目は、ベネッセ総合教育研究所「第4回子育て生活基本調査2011」および公益財団法人笹川スポーツ財団「子ども

のスポーツライフデータ 2012」を参考に、Holt et al. (2008) の手順から、保護者数名へのインタビューを通じて作成した。そして「親の教育信念(7項目)」、「スポーツ活動への期待(15項目)」、「財政的負担感」、「子どものスポーツ参加頻度」および「費用の支払い」を変数として分析を行った。

研究 では、親子間の相互影響モデルを構築し、スポーツへの関与が育まれる経路について分析を試みた(図2)。調査は、研究 と同様の手順において、プロスポーツ組織(Jリーグに加盟するチーム)が主催しているスクールに参加している親子を対象に実施した。配布枚数は328名であり279部を有効回答として分析した。調査項目は、主に先行研究(Dunn et al., 2016; Green & Chalip, 1997; Kanetrs et al., 2008)で使用された項目を援用または改編し使用した。具体的には、親の視点として、子どものスポーツ活動に対する「保護者の期待(2項目)」、「保護者の関心(2項目)」、「保護者の参与(3項目)」、「保護者の干渉(3項目)」および「保護者の支払額」とした。子どもの視点では「活動の楽しさ(3項目)」、「する・みる・ささえるスポーツへの関与」および「プロ選手への希望」で構成され、これら変数を分析に用いた。

4. 研究成果

研究

まず、確認的因子分析を行った結果、データに適合する結果であった(サッカー、CMIN/DF = 2.11、CFI = .92、SRMR = .07、RMSEA = .07; バスケットボール、CMIN/DF = 2.53、CFI = .91、SRMR = .06、RMSEA = .07)。加えて、両方のサンプルにおいて、合成信頼性は.83から.92、平均分散抽出は.50から.90、構成要素間の因子間相関は-.23から.68であり、項目および要因の妥当性が確認された。次に、共分散構造分析によるモデルの検証を行った。その結果、サッカーのサンプルでは、CMIN/DF = 2.11、CFI = .90、SRMR = .08、RMSEA = .07、バスケットボールのサンプルでは、CMIN/DF = 2.97、CFI = .91、SRMR = .07、RMSEA = .09を示し、データへの許容可能な適合であった。

因果関係をみると、親の教育信念は、財政的負担感(サッカー、 $\beta = -.26, p < .01$; バスケットボール、 $\beta = -.32, p < .01$)、子どものスポーツ参加頻度(サッカー、 $\beta = .22, p < .01$; バスケットボール、 $\beta = .16, p < .05$) および費用の支払い(サッカー、 $\beta = .18, p < .05$; バスケットボール、 $\beta = -.08, p > .05$)に影響を及ぼす結果となった。しかしながらスポーツ活動への期待は、子どものスポーツ参加頻度(サッカー、 $\beta = .03, p > .05$; バスケットボール、 $\beta = -.20, p > .05$)、費用の支払い(サッカー、 $\beta = -.04, p > .05$; バスケットボール、 $\beta = .12, p > .05$)には影響を及ぼさなかった。財政的負担感、子どものスポーツ参加頻度、費用の支払いの関係では、財政的負担感はスポーツ活動の参加頻度(サッカー、 $\beta = .13, p < .05$; バスケットボール、 $\beta = .17, p < .05$)と費用の支払いに影響を及ぼした(サッカー、 $\beta = .17, p < .01$; バスケットボール、 $\beta = .20, p < .01$)。

さらに、財政的負担感の媒介分析を行った結果、親の教育信念は、費用の支払い(サッカー、 $\beta = -.04, p < .05$; バスケットボール、 $\beta = -.06, p < .05$)および子どものスポーツ参加頻度(サッカー、 $\beta = -.03, p < .05$; バスケットボール、 $\beta = -.02, p < .05$)に対する媒介効果をわずかに示した。親の期待も、費用の支払い(サッカー、 $\beta = .02, p < .05$; バスケットボール、 $\beta = .07, p < .05$)および子どものスポーツ参加頻度(サッカー、 $\beta = .01, p < .05$; バスケットボール、 $\beta = .02, p < .05$)に対する媒介効果をわずかに示した。保護者の財政負担感は、子どもたちの活動参加を促進とスポーツスクールへの投資に関わる重要な媒介要因であることがうかがえた。さらに、保護者は財政的負担感を感じながらも子どもの教育に積極的投資をせざるを得ない環境にあることも垣間みる結果となった。

研究

研究 と同様に、確認的因子分析を行った結果、データに適合する結果であり(CMIN/DF = 2.33、CFI = .95、SRMR = .05、RMSEA = .07)、合成信頼性は.73から.86、平均分散抽出は.52から.75、構成要素間の因子間相関は.09から.56であり、項目および要因の妥当性が確認された。次に、共分散構造分析によるモデルの検証を行った。結果、モデルの適合度はCMIN/DF = 2.07、CFI = .95、SRMR = .05、RMSEA = .05を示し、あてはまりの良い結果であった。

因果関係をみると、保護者の支払額は、保護者の期待($\beta = .20, p < .01$)、保護者の関心($\beta = .15, p < .05$)、保護者の参与($\beta = .22, p < .001$)、保護者の干渉($\beta = .25, p < .001$)にそれぞれ影響を及ぼす結果であった。保護者の期待は、子どもの活動の楽しさ($\beta = .22, p < .05$)やプロ選手への希望($\beta = -.17, p < .05$)にまた保護者の参与は、子どもの活動の楽しさ($\beta = -.25, p < .05$)、するスポーツへの関与($\beta = .57, p < .001$)、みるスポーツへの関与($\beta = .47, p < .01$)、ささえるスポーツへの関与($\beta = .54, p < .001$)、プロ選手への希望($\beta = .49, p < .01$)に、それぞれ影響を及ぼすことが明らかとなった。加えて、保護者の干渉は、子どもの活動の楽しさ($\beta = .48, p < .01$)のみに影響した。活動の楽しさは、するスポーツへの関与($\beta = .31, p < .001$)、みるスポーツへの関与($\beta = .39, p < .01$)、プロ選手への希望($\beta = .24, p < .001$)にそれぞれ影響を及ぼした。一方で、保護者の関心は、どの要因にも影響を及ぼさない結果となった。

さらに、子どもの活動の楽しさを媒介変数として分析を行った結果、保護者の期待は、するスポーツへの関与($\beta = .07, p < .05$)、みるスポーツへの関与($\beta = .09, p < .05$)、プロ選手への希望($\beta = .05, p < .05$)において媒介効果がある結果であった。同様に、保護者の参与は、するス

スポーツへの関与 ($\beta = -.08, p < .05$)、みるスポーツへの関与 ($\beta = -.10, p < .05$)、プロ選手への希望 ($\beta = -.06, p < .05$) において媒介効果があり、保護者の干渉も、するスポーツへの関与 ($\beta = .15, p < .01$)、みるスポーツへの関与 ($\beta = .19, p < .01$)、プロ選手への希望 ($\beta = .11, p < .01$) をそれぞれ媒介することが明らかとなった。これらの結果より、保護者が子どものスポーツ参加に、楽しさ、競争、スポーツへの関与など様々な価値を認めていることが示され、先行研究 (Mirehie et al., 2019) と同様の見解を得ることができた。しかしながら保護者の参与は子どもの活動の楽しさにネガティブな影響を及ぼし、子どもへの過度な献身が子どもの活動の楽しさを損なう可能性が示唆される一方で、保護者の干渉が子どもの活動の楽しさにポジティブな影響を及ぼす結果が得られた。これらは本研究の独自性といえる。

研究の結果は、子どものスポーツスクール参加に対する保護者の信念や期待が、財政的負担や実際の行動に与える影響を示している。保護者の信念や期待は、保護者とその子どもの行動に影響を与えるための重要な前提条件であると考えられている。また、保護者の信念がそれぞれのスクール(サッカーとバスケットボール)の財政的負担感とスポーツ活動頻度に影響していることが示された。さらに保護者の期待は、それぞれのスクールともに財政的負担感に影響を及ぼした。先行研究では、保護者はあらゆる活動を通じて子どもの期待、価値観、参加行動を形成する役割を果たしていることが明らかとなっている (Simpkins et al., 2012)。これは、青少年のスポーツ参加をサポートする保護者の信念と期待を説明することを潜在的な因果関係によって裏付けたものである。特に保護者の信念に関しては、保護者が自分の子どもの教育について強い信念を持って接していることを裏付けている。保護者の姿勢として、「子どものスポーツ活動を応援する」、「毎回子どもを励ます」ということに加えて、「周りに遅れをとらないように勉強させたい」、「成績が伸びてほしい」という強い思いがあるのであろう。加えて「子どもの学校関連の行事に毎回参加したい」という保護者は、子どもの活動をいつもサポートすることで自身が精神的に満足している可能性も考えられる。これらの考察にもとづくくと保護者の経済的負担感は軽減されているのかもしれない。

また、保護者がスポーツによってもたらされる子どもの人間性を育む要素に強い期待があることが示された。保護者は、スポーツが直接子どもの身体に与える影響より、人間性を重視し「スポーツを楽しむ」ことで「人間として成長」し、「目標を持ってそれに向かって努力する」ことにつながると考えていることがうかがえた。つまり、子どものスポーツ活動に係る保護者は、単に子どもの技術レベルの向上や試合に勝つことなどを求めているのではなく、むしろ人間関係について学ぶことを期待しているといえる。しかしながら、保護者の期待が強いほど、財政的負担を感じやすく、財政負担感は保護者の月謝支払いや子どものスポーツ参加習慣の重要な媒介変数となりうることも明らかとなった。保護者の信念は、子どもの活動に献身的になるにつれて財政的負担の感覚も変化し、子どものスポーツ活動のためのサポート状況も変化する可能性が示唆された。このことは、保護者が自らの教育方針に沿って子どもへ積極的に投資する傾向であり、それに対して子どもが非常に前向きな経験をしていると保護者が認識していることを意味していることで、その後の保護者と子どもの行動に波及効果が起こることが考えられる。

一般に、子どもがスクールなどを通じたスポーツ活動へ参加するためには、保護者の経済的(物理的?)投資と心理的な投資が必要である。子どもの健康な体だけを願うのではなく、一流の選手になることを期待している可能性もある。例えば、Coakley (2006) は、コーチ、マネージャー、エージェント、メンター、サポーターとして機能する父親が子どもの才能の発達に前向きな刺激を与えると指摘している。一方で、Witt and Dangi (2018) は、子どもの活動にかかる費用が家計を圧迫していることを指摘し、子どもたちがスポーツ活動にとどまるか、離脱するかに大きく影響する可能性があるとして述べている。この現象は「プレーするためにお金を払う」と呼ばれることが多く、スポーツをサポートする責任は保護者の手に委ねられている (Heinze et al., 2017)。本研究結果では、保護者が月謝などを支払うことで、子どもに対する保護者の期待、関与、参与、干渉といった心理的サポートに影響を及ぼしている。このことは、財政的負担感も含めて、支払いをすることによって子どもと一緒に保護者自身も成長していこうという意識の表れなのかもしれない。Dunn et al. (2016) は、財政負担という保護者の最善の行動にもかかわらず、多額の経済的支出は子どものスポーツ活動の楽しさや参加意欲を低下させる可能性があるとして指摘している。しかしながら、保護者自身が支払いを伴うことで子どもと一緒にスポーツ活動へ関わっていかうとする意図が本研究結果から垣間見ることができた。月謝の支払いが保護者の心理状況にポジティブに作用し、いかにして子どもにスポーツ活動を楽しんでもらうかを試行錯誤しながら模索しているのかもしれない。

子どものスポーツ参加において保護者の過度なプレッシャーに伴う悪影響も懸念されているが、本研究では異なる見解が示された。保護者のスポーツに対する意識は、子どもたちのスポーツに対する関心度合いを助長する手段となる可能性があり、保護者のプレッシャーが必ずしもネガティブな要因ではないことが示唆されている。子どもとの密なコミュニケーションは、保護者からのプレッシャーをポジティブにとらえ、子どものスポーツ活動への関与にもポジティブに影響する可能性がある。この状況は、子どもにポジティブなプレッシャーを生むとともに、子

どもが保護者の期待に応えようとする意識が生起するのではないだろうか。これら保護者の関与が子どものスポーツへの永続的関与やスポーツ活動の継続に導くのであろう。

最後に、子どもが参加するスポーツ組織は保護者にとってスポーツへの社会化の現場となりうる。すべての子どもや若者がスポーツやスポーツの機会を公平に担保できるようにするためには、経済的な障壁に対処しようとする今後の取り組みが求められる。現場レベルでは、スポーツ組織などにおいて、保護者と子どもの意識の経路が解明されるならば、子どものスポーツ習慣形成のために戦略を立てることが可能になる。政策レベルでは、政策立案時における子どものスポーツ活動への補助（例えば用具の無料貸与または提供、スポーツクラブ入会サポート、プロスポーツ観戦の優遇制度など）といった具体的施策の立案も可能となる。

なお、これら研究成果は国内外の主要ジャーナルへの投稿準備中である。

< 主な参考文献 >

- Coakley, J. (2006). The good father: Parental expectations and youth sports. *Leisure studies*, 25(2), 153-163.
- Coakley, J. (2017). *Sport in Society: Issues and Controversies*. 12th Ed., McGraw Hill.
- Dunn, C. R., Dorsch, T. E., King, M., & Rothlisberger, K. (2016). The impact of family financial investment on parent pressure, child enjoyment, and commitment to participation in organized youth sport. *Family Relations*, 65(2), 287-299.
- Eccles, J. (1983). Expectancies, values and academic behaviors. In J. T. Spence (Ed.), *Achievement and achievement motives: Psychological and sociological approaches* (pp. 75-146). San Francisco, CA: Free man.
- Elliott, S. K., & Drummond, M. J. (2017). Parents in youth sport: What happens after the game?. *Sport, Education and Society*, 22(3), 391-406.
- Green, B. C., & Chalip, L. (1997). Enduring involvement in youth soccer: The socialization of parent and child. *Journal of leisure research*, 29(1), 61-77.
- Harwood, C. G., & Knight, C. J. (2015). Parenting in youth sport: A position paper on parenting expertise. *Psychology of sport and exercise*, 16(1), 24-35.
- Heinze, J. E., Heinze, K. L., Davis, M. M., Butchart, A. T., Singer, D. C., & Clark, S. J. (2017). Gender role beliefs and parents' support for athletic participation. *Youth & society*, 49(5), 634-657.
- Holt, N. L., Tamminen, K. A., Black, D. E., Sehn, Z. L., & Wall, M. P. (2008). Parental involvement in competitive youth sport settings. *Psychology of sport and exercise*, 9(5), 663-685.
- Kanters, M. A., Bocarro, J., & Casper, J. M. (2008). Supported or pressured? An examination of agreement among parents and children on parent's role in youth sports. *Journal of Sport Behavior*, 31(1), 64-80.
- Knight, C. J., Boden, C. M., & Holt, N. L. (2010). Junior tennis players' preferences for parental behaviors. *Journal of applied sport psychology*, 22(4), 377-391.
- Mirehie, M., Gibson, H., Kang, S., & Bell, H. (2019). Parental insights from three elite-level youth sports: Implications for family life. *World Leisure Journal*, 61(2), 98-112.
- Simpkins, S. D., Fredricks, J. A., & Eccles, J. S. (2012). Charting the Eccles' expectancy-value model from mothers' beliefs in childhood to youths' activities in adolescence. *Developmental psychology*, 48(4), 1019.
- 武田大輔・中込四郎 (2003). 子どもに対する親の行動に伴うメッセージと競技における子どもの認知・情動的態度との関係: ジュニアサッカー選手を対象として. *体育学研究*, 48(4), 421-438.
- Wheeler, S., & Green, K. (2014). Parenting in relation to children's sports participation: Generational changes and potential implications. *Leisure studies*, 33(3), 267-284.
- Witt, P. A., & Dangi, T. B. (2018). Helping parents be better youth sport coaches and spectators. *Journal of Park and Recreation Administration*, 36(3), 200-208.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 YASUHIRO WATANABE, JAMES J. ZHANG
2. 発表標題 THE INFLUENCE OF PARENTS' ATTITUDE AND EXPECTATION ON YOUTH SPORT PARTICIPATION: THE FOCUS ON SENSE OF FISCAL BURDEN
3. 学会等名 THE 3rd WORLD ASSOCIATION FOR SPORT MANAGEMENT WORLD CONFERENCE (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺泰弘、松本耕二
2. 発表標題 子どもはスポーツにおいて何を認知するか？ - スポーツ観戦を事例とした予備調査 -
3. 学会等名 日本生涯スポーツ学会第20回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松本 耕二 (Matsumoto Koji) (60264983)	広島経済大学・経営学部・教授 (35402)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

米国	The University of Georgia			
----	---------------------------	--	--	--